

Fellowship's Miscellany

News and Reports

ディケンズとヴィクトリア朝中期のジャーナリズム “Charles Dickens and the Mid-Victorian Press 1850–1870” at University of Buckingham (28–31 March 2012)

(報告) 佐々木 徹

Toru SASAKI

3月28日から3月31日にかけて、“Charles Dickens and the Mid-Victorian Press 1850–1870”と題するコンファレンスがバッキンガム大学で行われた(レスター大学共催)。ロンドンから電車とタクシーで2時間ほどの距離にあるバッキンガムはこぢんまりとしたきれいな田舎町で、とても感じのいいところだった。キャンパスも美しく、学会の会場としてはまったく文句なし。

しかし、この時期にある学会はやっかいで、僕の場合科研費を使って行ったのだが、たまたま最終年度に当たっていたので年度をまたいでお金を使うことができず、31日には絶対帰国していなければならなかった。そのためには30日に離英するよりなく、同日午前のセッションを聴き終わったらすぐバッキンガムからヒースローに直行。おかげで John Sutherland, Robert Patten といった有名な学者の講演を逃してしまった(Sutherlandは話し方が単調で講演はうまくないというのがもっぱらの評判で、Pattenは口数の多いアメリカ人の典型みたいな人だったから、結局大した損失でもなかったように思う)。

かくして短い滞在ではあったが、Michael Slater, Joanne Shattock, Paul Schlicke, Louis James, Laurel Brake, Iain Crawford, Holly Furneaux, Gail Marshall といった錚々たる面々の話が聴けた。この学会で読まれたペーパーはまとめて出版されるらしいので、詳しくはそちらに譲るとして、特に印象に残ったのは Holly Furneaux だった。“Household Words and the Crimean War”という演題で、頭のよい、きれいにまとめられた話をしていて、いずれ是非日本に来てほしいものだ。いや、実は、「いつか来てね」と言ったら、「喜んで!」という返事であった。結構、純真

ない人。

John Drew はもっぱら主催者として走り回り、自分の発表はなく、Dickens Journals Online のチーム・メンバーたちと一緒にデモンストレーションを行っただけだった。これは僕も見せてもらったが、便利な世の中になったものだと痛感した。彼は組織力もあり、ユーモアもあり、なかなかの人物だと思う。きっとこれからのディケンズ研究を主導していく存在になるだろう。

また、会場では Anthony Burton が企画した、“Charles Dickens and the Victorian Press” という展示が行われていた。これは *Household Words* などの現物もまじえた非常に充実したものであった。幸い John Drew の厚意により、これを撮影したビデオがわがフェロウシップのホームページ（「新着情報」）で公開されている。是非一見をお薦めしたい。

今回の学会全体を通して、ジャーナリズム研究は活気があるという印象を受けた。今後の隆盛が予想されるような気がする。ただ、研究の傾向はかなり歴史寄りで、文学的という感じはしない。そのあたりが個人的には残念ではあるが、



会場にて John Drew と